

お伽笑話

藁と炭と蠶豆

と よ 子



或處あるところに一軒けんの百姓家しやうみやがありました。此家このうちのお神かみさんが、或時あるとき蠶豆たらまめをゆでやうと思つて先づ爐ろの中なかへ藁わらを一握つか入れてマツチで火ひを付けてそれから其上そのうえへ炭すみの塊かたまりをガラ／＼と五つ六つ入れて、そして此火このひの起おこる中うちにと思つてお神かみさんは流ながしの所ところへ行つてそら豆よめを桶かじに入れて洗ちつて居をりました。其中そのうちに先まづに入いれた炭すみの中なかに大層たいそうはねる炭すみがあつてポンと云いふ音おとと一所しよに藁わらが一本いっぴんと炭すみが一つ爐ろの外そとにはね飛ばとされてユロ／＼と轉ころがつて流ながしの側そばの土間どまへ落ちました。炭すみはしたゝかに腰こしを打ち藁わらは長い足あしを痛いためて一所しよに顔かほをしかめて

「アイタ……、誰だれだへ人ひとをこんな所ところへ抛なり出して、ひどいことをするぢやな

いかと二人で同じことを云つて居ました。頓がて起き上つた藁は炭が自分の側に同じ様にしかめ顔して寝て居るのを見て

「オイ炭さん、君はひどいね、人をこんな所へはね飛ばして！」と云ひますと炭は大層憤つて

「僕ではないよ、僕の隣りに居た堅炭君がはねたのだよ。僕だつて飛んだ災難ぢやないか」と云ひますので藁も機嫌を直して

「ソウカ、それぢや仕方がない、喧嘩したつて仕方がないから、マア少し休みませう」。

と云つて話して居る中にお神さんは豆を洗つてお鍋の中へザアツとあけやうとすると一番後から落ちて行つた豆が一つお鍋の中へ入らないでお鍋の縁へ打つかつてボンと飛んで板の間に落ちそれからユロくと轉がつて土間へ落ちました。たが其處が丁度藁と炭の居る所でした。元氣な藁は聲を掛けて

「ヤア、蠶豆君、君も落ちて來たね、僕等も先きから此處へ落ちて來てたのだ

よ、マア話し玉へ」と云ひますと

豆「ア痛、タ……、何うもコレハひどい目に遇つた。ア、痛いく、鍋の縁で頭を打つて板の間で腰を打つておまけに土間へ落ちて肩をいやと云ふ程打つてしまつた。ア、痛いくとしかめ顔をして居ました。」

頓がて暫くして藁と炭と蠶豆の三人は

「何うだ諸君！今日は天氣もよし風も暖かではあるし、それに僕等はもう別段用もないだらうから一つ是から散歩に出掛けやうではないか」と云ふ藁の云ひ出しに賛成して共々に先づ野原へと出掛けて参りました。

何せよ時は春の初めて四方の山が春めいで來て鶯があちこちの梅の枝でホーホケキヨくと鳴いて居りますし蝶々はきれいな羽根をひらくと動かしてそここの蓮華の花を飛び回はつて居りまして何とも云へぬよい心持ちになりました。藁は例の元氣な聲を細い胴腹からしほり出して

ひばりは唱ひ蝶々はかどる

春の野山に遊ぶはうれし

そこにはよめなこゝにはつくし

たんぼ、菫蓮華花

花をばとりて草をば摘みて

うちの母さんにお土産にさせう

と歌ひました。春の野山は一層面白いものになりました。三人はふぎけながらだんくと歩いて参りますと、ある小さな川の所へ来ました。處が此川には橋がありません。大人は皆ピョンピョンと飛び越して行つてしまいましたが、三人には何うしても飛び越す譯には行きません。三人は集まつて皆で

「何うしよう。モウ歸らうか」と云ひますと例の藁は

「君等そんな意氣地のないことを云ふのはよし給へ。僕が茲で橋になるからね。君等は僕等の脊中を渡り給へ」と云ひながら藁は勢を伸ばして向ふの縁へ手を掛けて橋となりました。残に残つた炭と豆とは何方も負けず劣らずの憶病症

なのでお互に

「君、先きへマア渡り給へ、イヤ君から渡り給へ」と云つて居ました。餘り何時迄も果てしがないので短氣ものゝ藁は又怒り出して

「何だつて二人でぐづく云つて居るんだ。そんなに何時迄もぐづくして居ては僕がくたびれるではないか。早く渡つて呉れ給へよ」と云のに驚いて先づ炭が渡ることにになりました。が何がさて炭はおつかなびつくりで、足を踏みしめながら「ヨイシヨ、ドッコイシヨ」とだん／＼渡つて来て今や真中頃と思ふ頃に炭はふと川の中を見ますと今しも田圃から流れ出した水は渦を巻いて勢ひ鋭く流れ行く其水の上に何處から落ちたか一疋の蝶々が水の渦に巻かれながら目を廻して溺れ流れて行くのがちらりと炭の眼に入りました。之を見た炭は「ア危険!」と思うと足がフラ／＼と戦へて立つて居られないので我知らず「アツ」と云ひながら藁の胴腹へかぢり付きました。かぢり付かれた藁は苦しいのと重いのに堪え切れないうで是も「ア、、、」と云ひながら二人一所ドブ

と川の中へ落ちてブクブク水に巻かれて下手の方へ流されて行きました。之を見て居た蠶豆は驚いたの驚かないのつて、大變に驚いて「ア、大變だア早く……」と云つたかと思ふと是は又餘り大きな口を開けて叫んだので口が横へ裂けて氣絶して倒れて仕舞ひました。

暫くして蠶豆は眼を覺して見ると今しも學校から歸りがけの一人の女の子が荷物の中から裁縫のお道具を出して蠶豆の破けた口を縫つて呉れて居る所でした。女の子は頓がて縫ひ上げてから丁寧に蠶豆をいたはりながら側の畑の中へ埋めて家へ歸つて行きました。斯様にして藁と炭とは死んでしまいましたが蠶豆はお陰で助かつて今も盛んに畑に生つて居ります。併し女の子が縫つて呉れる時に黒い糸で縫つて呉れましたので蠶豆には今も口の處に黒い跡が残つて居るのだそうです。

めでたし〜〜〜